

1年間の本校の教育活動を振り返る

3月25日修了式のお話より

「その時々の人や言葉との出会いが、人生の岐路に」

校長 大高 雅子

あやめ野中学校での令和8年度の学校生活が今日で修了します。みなさんは、この1年間、どのような自分づくりができましたか。

3月13日の卒業式の式辞の中で、私は、誰の心の中にも優しさはある、そうお伝えしました。優しさとは、「優しくしたい気持ち」のことです。それは、一人一人の心の中にちゃんとあって、その時の状況や感情によって、発揮できたり、できなかったりするものだと思います。発揮できないときは、恥ずかしさや、苛立ち、怒りなどの感情に遮られて、自分の中の優しさをとじこめてしまっている状況です。心の制御ができないときに、穏やかに接したり、優しい対応をしたりすることはとても難しく、そのような経験は誰でもあるのではないのでしょうか。人との関係でモヤモヤとした葛藤をすること自体が、人間らしさでもあると言えます。

心を整理し、時に視点を変え、自分なりに消化していくことは並大抵のことではありません。心の内に生じた葛藤を、よく考え、整理し、切り替えて、冷静な対応や行動につなげていけるような力をつけることは、まさに、「生きる力」そのものと言えます。そして、その力を伸ばすために、必要な言葉を獲得していく経験がとても大切です。あなたたちは、この1年間の各教科や行事での学びを通して、誰かとの関わりにおいて必要な言葉や、状況を判断して適切に行動する力をつけたと言えます。年齢や経験を重ねていくうちに、衝動的、感情的に言葉を発することや、後先考えずに行動することが少なくなるのは、一度心の中で考えてから行動するための言葉や行動する力をつけていくからです。特に、「言葉」は、自分と相手との間にある、調整システムです。調整しても思ったとおりに伝わらず、相手との橋が壊れてしまうこともあります。そんな時は、「ごめんね」という優しい言葉で、あなたと相手との間に、再び橋を架けていけばよいのです。関わることを諦めたり、恐れたりせず、やってみようとする経験こそ力になっていくのです。

3学期の始業式後に、廊下で会った2年生の生徒が、「校長先生、次に学校の外で会ったら、絶対に声をかけます！」と伝えてくれました。私は3年間、機会あるごとに、みなさんにたくさんの言葉を伝えてきましたが、自分ごととして考えてくれたのだなと分かる瞬間はいつもとても嬉しくなります。

あなたたちがこれからの人生を歩む中で、その時々、人や言葉との出会いがあります。出会いを生かす力があれば、世界は広がり、チャンスを掴むことができるのです。

チャンスを生かして、自身の力をつけていってほしいと願っています。“人生の岐路”とは、自分の目の前を通り過ぎていくたくさんの言葉や出会いを掴んだ瞬間に起きる変化のことだと、私は思っています。

3月25日は、1年間の終わりであり、次の始まりでもあります。ほっとした気持ちに包まれながらも、心の中で4月からの自分を描いてみることを期待して、私の話を終わります。

